

第五十四回中央教化研究会議

SDGsから仏教者を問い直す

——ジェンダー平等を契機にこれからの教師像を構築する——

中 井 本 蓉

第五十四回中央教化研究会議、「SDGsから仏教者を問い直す—ジェンダー平等を契機にこれからの教師像を構築する—」と題しまして、問題提起をさせていただきます。まず、テーマと開催趣旨の再確認をさせていただきます。「SDGsから仏教者を問い直す—ジェンダー平等を契機にこれからの教師像を構築する—」。そして、開催趣旨より、「今年度の中央教研においてはSDGs、とりわけジェンダー平等を切り口として、現代日本仏教を担うわれわれ僧侶のあり方を問い直し、教師のあり方について新たな提言を目指して議論を深めたいと考えます」。

まず、SDGsから見えてくる問題その一としまして、ジェンダー平等の実現についてお話しさせていただきます。「持続可能な開発報告書二〇二一」というSDGsの報告書がございますが、こちらに、SDGs達成度ランキングというものが載っております。国連加盟国百九十三か国中、日本は現在十八位です。過去のランキングは、二〇一七年は十一位、二〇一八年と二〇一九年は十五位、そして2020年は十七位となっております。

この報告書では、SDGsの十七の目標それぞれに、四段階の達成度評価がつけられております。緑は「SDGs達成」、黄色は「課題が残っている」、オレンジは「重要な課題が残っている」、そして赤が、「大きな課題が残っている」という評価です。日本においては、現時点で五つの目標について、「大きな課題が残っている」という一番低い

一方、「五、ジェンダー平等を実現しよう」についての各国の達成度を見てみますと、上位五十か国中、赤い評価になっているのは、日本と韓国だけです。五十か国中、二か国だけが赤い評価になっています。これは、他の国では達成が進んでいるのに、この二か国、日本と韓国では達成が遅れているということの表れだと思われれます。ジェンダー平等の実現に関しては、SDGs達成度において日本より上位の国だけでなく、下位の国でも、目標達成に向けた動きが進んでいるということになります。つまり、ジェンダー平等の達成は、世界的に見て難しいものではなく、何か日本特有の原因があつて目標達成が阻まれていると考えることができるのではないのでしょうか。

次に、SDGsから見えてくる問題その二、「主婦がいないと回らない構造」についてお話させていただきます。SDGsでは、十七の目標を達成するための詳細な指標、ターゲットとして、百六十九の項目が設定されています。「五、ジェンダー平等を実現しよう」にも九つのターゲットが設定されており、日本においては、特に次の三つの項目について、大きな課題が残っているという評価を受けています。

- 一、国会での議席保有数の男女格差。
- 二、賃金の男女格差。
- 三、無給労働に費やす時間の男女格差。

「三、無給労働に費やす時間の男女格差」で言われている無給労働とは、日本においては、かつて専業主婦が中心となつて担ってきた家事・育児のことを指しています。この無給労働に費やす時間の男女格差に関連する著作として、中野円佳氏の『なぜ共働きも専業もしんどいのか―主婦がいないと回らない構造』（PHP新書、二〇一九年）が挙

げられます。中野氏は、ジャーナリストであると同時に、夫と子供と共に暮らす共働き世帯の女性です。中野氏は、一九九九年以降、日本においては共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回っているのに、いまだに日本が専業主婦前提社会であるという問題を指摘しています。

さらに、日本社会の現状について、中野氏は次のように述べています。

日本の都心部ではいまだに待機児童問題があり、子どもを満足に保育施設にすら預けられない。基本的に社会全体が専業主婦前提で設計されたときのままになっていて、共働きが増えていく状況に対応できていない。

だから共働き夫婦にとってしんどい社会になっているわけだが、それは家事育児の一極集中という意味で専業主婦にとっても、そして仕事と家計負担の一極集中という意味でその夫たちにとっても、あまり歓迎すべきでない状況をループのように生み出している。

(中野「二〇一九」六頁)

ここでは、専業主婦前提社会によって苦しんでいるのは、共働き世帯だけではないという指摘がなされています。専業主婦には家事・育児が、その夫には仕事と家計負担が一極集中してしまうため、専業主婦前提の社会の中において、専業主婦世帯でさえも苦しんでいる場合があるということです。

次に、専業主婦前提社会の特徴について、中野氏は次のように述べています。

専業主婦前提社会は、大半の男性が正社員になり長時間労働をする反面、女性に全面的に家庭を任せ、労働市場では制約のある人材として排除したり周縁に追いやったりしてきた。男女賃金格差や保育、教育分野への公的投資の少なさが、ますます女性の専業主婦化を合理化し、女性たちの献身や自己納得がさらに構造を強化してきた。

その結果、少子化は進み、女性活躍はいまいち進んでいない。様々なほころびが出始め、この循環構造を見直す必要が出てきている。

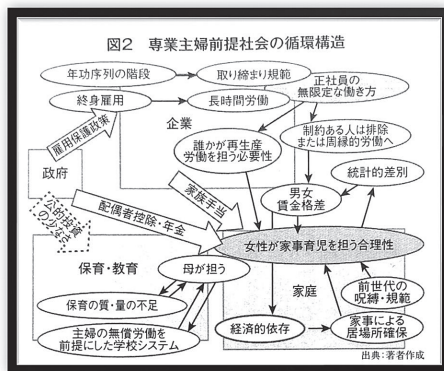
（中野「二〇一九」九頁）

こちらは、中野円佳氏が作った、「専業主婦前提社会の循環構造」という図になります（図二）。見ていただくと非常に複雑なのですが分かりますが、問題が複雑であるということを表すために作られていますので、ちょっと分かりづらい図となっているのだと思います。「女性が家事・育児を担う合理性」という部分にあらゆる方面から矢印が向いてきており、そして、女性の方からもいろんな方面に矢印が出ていて、周囲の期待に女性が応えているという形でこの構造を、女性の側も、そして社会の側も作ってしまったということが、この図によって表されています。

ここでは、専業主婦前提の社会が単に家庭と企業の関係によって形成されているのではなく、政府や教育・保育に関するさまざまな要素が影響し合い、「家庭において女性が専業主婦であることが合理的である」と思われるような構造」が形成されていると指摘しています。さらに、負担を強いられているはずの女性自身が、献身や自己納得に

03 SDGsから見えてくる問題（2）「主婦がいないと回らない構造」

〔図二〕



中野円佳『なぜ共働きも専業主婦もしんどいのかー主婦がいないと回らない構造』(p.9)より

よってこの構造を強化させてきたという側面を指摘し、この「循環構造」を見直すべきであるとしています。

また、専業主婦前提社会という循環構造の中で、男性が抱える苦悩について、中野氏は次のように述べています。

そしてその循環構造には、片働き男性は妻が専業主婦ゆえに転職しづらい、共働き男性は、職場が、家に専業主婦の妻がいる。男性を前提とした働き方だから早く帰れない……といった具合に、ばつちり男性たちも組み込まれている。

(中野「二〇一九」二四五―二四六頁)

ここでは、片働き男性、専業主婦世帯の夫は家計を支えなければならぬため転職しづらく、共働き男性、共働き世帯の夫は、職場が家に専業主婦がいることを前提として動いているため早く帰ることができず、家事に協力できないとして、夫である男性たちも同様に苦しいのだと指摘しています。

さらに、「循環構造」というものの特徴について、中野氏は次のように述べています。

循環構造というのは相互補完的であり自己生成的な側面があるから、その中のほんの一部をいじっただけでは変わらない。崩れつつあるからといって逆の好循環が起こるといってほど単純でもない。古い構造が慣性の法則的に回り続けているシーンは日常に溢れていて、私たちを苦しめている。

(中野「二〇一九」二四六頁)

ここで述べているように、中野氏は、今の「専業主婦前提社会の循環構造」を見直すべきであるとしながらも、循環構造というものは相互補完的であり、自己生成的でもあるから、それを変えることは非常に難しいとしています。

また、現在その循環構造が崩れつつあるからといって、逆の好循環が起こるといってほど単純でもないとして、このま

ま放っておけば、ますますよくない方向へ社会が転がっていつてしまう可能性も示唆しています。

そして、このように「古い構造」が残っていることの弊害は、社会の至るところにあると指摘しています。「三、無給労働に費やす時間の男女格差」という課題に立ち返ってみると、いまだにこのような循環構造を持つ日本社会にとって、この課題の達成は想像以上に難しいといえます。つまり、この課題は、ただ単に夫や周囲の人間の意識の問題であるだけでなく、専業主婦前提社会という循環構造の問題でもあるということです。

以上、専業主婦前提社会という観点から、日本社会の構造的な問題を指摘している中野氏の説を紹介しました。日本が、「五、ジェンダー平等を達成しよう」という目標を達成するためには、人々の意識改革だけでなく、社会構造から変えていかなければならないということがわかりました。しかし、同時に、複雑な循環構造を形成している現在の日本社会を変革することは、非常に難しいということもわかりました。

次に、SDGsから見えてくる問題その三として、「教え」と「現状」の矛盾についてお話しさせていただきます。二〇二〇年八月二十五日、全日本仏教会は、仏教とSDGsを考えるシンポジウムとして、「現代社会における仏教の平等性とは〜女性の視点から考える〜」を開催しました。このシンポジウムについて、宗教学者であり、曹洞宗寺院の寺院でもある川橋範子氏は、全日仏機関誌『全仏』第六四七号（二〇二〇年十月号）において、次のようにコメントしています。

仏教では男女は無差別平等であると説いていたが、そうであればなぜ現状ではそうなっていないのかが問いただされるべきである。

（川橋【二〇二〇】）

ここで川橋氏は、僧侶が男女は平等であるという教えを説くのであれば、自らが所属する組織や寺院内においてそれが実現されているかどうか、顧みる姿勢を持つべきであると指摘しています。

日蓮宗では、『妙法蓮華経』提婆達多品第十二において八歳の龍女が成仏したことを根拠に、女性も成仏できる、男女は平等であるとしています。しかしながら、宗門内を見ると、全国から四十五人選出される宗会議員のうち、女性議員は現在二名で、内局の役職に女性が就任したことはこれまで一度もありません。前章で紹介した中野氏は、『女性が輝く社会』という標語がむなく思えるのも、構造的な女性の負担構造は変わっていないからだ（中野「二〇一九」二四五頁）と述べています。つまり、表向きに掲げられた標語に対して、現実の状況は変化しないままだということです。川橋氏のコメントも、中野氏と同じ問題意識のもとにあると考えられます。僧侶が説く教えと仏教界内部の現状が、矛盾しているということではないでしょうか。

国際宗教研究所研究員、丹羽宣子氏の著書に、『僧侶らしさ』と〈女性らしさ〉の宗教社会学―日蓮宗女性僧侶の事例から―（晃洋書房、二〇一九年）があります。本書は、「日蓮宗の女性僧侶の問題経験の語りから、「お坊さんの世界は男社会」の多角的理解に努めた」（丹羽「二〇一九」一九四頁）ものですが、ここに掲載された女性教師の語りに、次のようなものがあります。

お友達とも「私たちが衣着て走り回ってるよねえ」って言うんです。そういう時は誰かが「奥さん欲しいよね」なんてね。笑っちゃうよね。ほんとうですよ。だからその辺のところは倍大変ですよ。もしかしたら、今は若い人は独身の方がかえっていいでしょうね。自分のペースでやれますから。

（丹羽「二〇一九」一六四頁）

このような女性教師の語りに対し、丹羽氏は次のように述べています。

ここでFさんは、男性僧侶が「奥さん」によって支えられていること、そして、女性に課せられる家庭での役割の重責を見抜き、指摘しているのだ。

（丹羽「二〇一九」一六四頁）

ここでは、男性僧侶であれば妻によって支えてもらえる家庭内の役割も、女性教師の場合は自分でこなさなければならぬという、「構造的な問題」が指摘されています。

一方で丹羽氏は、男性教師の苦悩についても次のように言及しています。

男性僧侶もまた、〈男社会〉の中で悩み、戸惑い、苦しみ、問題経験を抱えながらも、僧侶として生きていくとしていると推察されるのである。しかし、彼らの悩みや苦しみは「女性僧侶や在家出身者より恵まれているのに」などといった言説によって軽視されやすい。

（丹羽「二〇一九」一九五頁）

ここで丹羽氏は、ジェンダー問題においては「多数派」であり、「権力者側」である男性僧侶が抱えるジェンダーに起因する苦悩が、見落とされやすいと指摘しています。つまり、男性僧侶（特に寺院出身者）もまた、寺の長男として生まれたために跡取りになるという選択肢を選ばざるをえなかったり、住職としての重責に悩まされたり、男らしさを求められたりといった、「男社会」において男性であるがゆえの生きづらさを感じているということです。しかも寺院出身の男性僧侶は、女性僧侶や在家出身者に比べれば恵まれているという理由で、これらの苦悩を軽視されがちになると言います。このような視点も、ジェンダー平等を考える上で忘れてはならないものでしょう。

ただ、これらの問題は、仏教界（または宗門内部）で抱えているものであり、ジェンダー問題を含め、SDGs全体にわたって、日本社会（外部）に向けた仏教界からの積極的なアプローチも、もちろん必要であると思われる。

参考文献

- Sachs, J., et al. (2021).
The Decade of Action for the Sustainable Development Goals: Sustainable Development Report 2021. Cambridge: Cambridge University Press.
- 川橋範子 「『く仏教徒SDGs』現代社会における仏教の平等性とは—女性の視点から考える—」(『全仏』第647号、全日本仏教会、2020年、p.10)
- 中野円佳 『なぜ共働きも専業主婦もしんどいのか—主婦がいないと回らない構造—』(PHP出版社、PHP新書、2019年)
- 丹羽宣子 『く僧侶らしさ』とく女性らしさ』の宗教社会学—日蓮宗女性僧侶の事例から—』(晃洋書房、2019年)

3

最後に、既に仏教界から世界に対して行われているアプローチを、幾つか紹介させていただきます。

まず、SDGs おてらネットワーク。こちらは、本日ご講演をいただいた西永先生が携わっていらっしゃる組織でございますが、超宗派で形成された、僧侶がSDGs を考えていくグループとなっております。次に、おてらおやつクラブ。こちらは、超宗派の僧侶を中心に組織され、企業ともタイアップして全国の寺院とネットワークを結び、貧困家庭を支援しているNPO団体になっていきます。これらの仏教界の活動のキーワードは、「社会とつながりながら」、「持続可能」であるということです。

また、各寺院単位で信行会等の活動を地道に続けて、檀信徒の信仰継続に努力するという従来からの活動や、新たに未信徒をお寺に呼び込む活動も、もちろん重視されなければなりません。先行きの見えないうコロナ禍の現状も考慮すると、人と人との接触が制限される環境下においては、SNS を利用してそのような活動を継続することは、もはや必須条件と言えないかと思われれます。

最後に、こちらが、今回の問題提起で用いた参考文献となっております(図三)。以上で問題提起を終わらせていただきます。ご清聴、誠にありがとうございました。